希望創発センター
Center of Education and
Research for Hope-Emergence

2023 年度
希望創発センター
事業報告書

2024 年5月

高知大学 希望創発センター

目　　　　次

1. ガバナンス　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.1 教員スタッフ構成
1.2 主な委員会等の開催実績

2. 希望創発研究会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
2.1 概要
2.2 2023（R5）年度取組実績
2.2.1　参画者
2.2.2　研究会例会の開催実績
2.2.3　研究会例会プログラムの構成
2.2.4　研究会におけるチーム編成と支援体制

3. ＯＴＯＹＯプロジェクト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3.1 概要
3.1.1　目的
3.1.2　実績と成果
3.2 2023（R5）年度活動報告
3.2.1　明日の社会の希望をになう人財プログラム
3.2.2　東豊永地区希望創発プログラム

4. 人間関係形成インターンシップ（Society Based Internship；SBI）・・・・・8
4.1 概要
4.2 2023（R5）年度活動報告

5. 戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
5.1 概要
5.2 本学の取組
5.3 2023（R5）年年度活動報告

6. その他　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
6.1 学生自主団体 Seekers の活動実績
6.1.1　対話すなっく
6.1.2　オンライン公民館
6.1.3　出前養殖プロジェクト

参考資料
2023 年（R5）年度希望創発研究会 最終報告会資料の要旨集　・・・・・・・・・・・13

１　ガバナンス

1.1　教員スタッフ構成

2023（R5）年度の教員スタッフは以下のとおり。

学外有識者等から『希望創発エコシステムづくり』に関し、意見又は助言を求めることにより、希望創発センターにおける『希望創発エコシステムづくり』を更に推進することを目的として令和４年度からアドバイザリーボードを設置し、メンバーとして以下８名が所属している。

※アド：アドバイザリーボードメンバー

・円谷友英（アド）：兵庫県立大学教授
・谷　俵太（客員）：ACADEMIC VISION 合同会社　代表社員
・三木克哉（アド）：合同会社ｋ３ ﾃｸﾉﾎﾟｰﾄ代表/元㈱ダイセル

・佐藤智子（アド）：東北大学准教授

・加藤　真（アド）：客将代表／元㈱富士通総研　取締役執行役員常務
・中澤二朗（アド）：元新日鉄ソリューションズ㈱　人事部長
・口村　圭（客員）：シミックホールディングス㈱ Chief Human Resources Officer
・菅原　誠（客員）：東京都中部総合精神保健福祉センター　副所長／産業医
・中島　哲（客員）：元トヨタ自動車㈱
・中島大輔（客員）：日本電気㈱東京総括部長ピープル＆カルチャー部門 L＆D 総括部長
・中島好博（客員）：パナソニック コネクト㈱　人事総務本部　キャリアデザイン部　部長
・藤本治己（客員）：㈱HR＆Legal Solutions　代表取締役社長
・三橋明弘（アド）：旭化成㈱　人事部　人財･組織開発室長
・宮本智司（アド）：元旭化成㈱、元旭有機材㈱
・元田勝人（アド）：元全国健康保険協会　東京支部長

・岡田一水（客員）：㈱地域商社こうち（高知銀行グループ）マーケティング事業部　取締役部長
　㈱高知銀行　人事部付兼地域連携ビジネスサポート部　主任業務役
・田村樹志雄（客員）：　㈱KOKUBAN　代表取締役／経営コンサルタント
・土居雅夫（客員）：㈱ビィソイル　代表取締役
・宮本高憲（客員）：㈱高南メディカル　代表取締役社長

・池田啓実（アド）：高知大学名誉教授／前センター長
・渡辺　茂（兼務）：センター長／理工学部教授
・大嶋俊一郎（兼務）：副センター長／農林海洋科学部教授
・市川昌広（兼務）：地域協働学部教授
・大石達良（兼務）：地域協働学部長／教授
・菅沼成文（兼務）：医学部教授
・鈴木紀之（兼務）：農林海洋科学部准教授
・高橋　俊（兼務）：共通教育主管／人文社会科学部教授
・長崎慶三（兼務）：農林海洋科学部教授
・波多野慎悟（兼務）：理工学部講師

1.2　主な委員会等の開催実績

2023（R5）年度は、特任教員が不在のため運営推進委員会を休会とし、センター長、副センター長が主な委員である企画運営室会議においてセンターの運営及び事業全般の審議、報告を行った。また教員会議は、必要に応じて開催した。

会議名	開催実績
運営推進委員会	休会
企画運営室会議	原則月1回のオンライン開催とし、最終的に計 15 回を開催した。
教員会議	必要に応じて開催した。

２　希望創発研究会

2.1　概要

○　特徴１：思考行動変容支援と知的情報提供のための AOL 型と SOL 型セミナーの実施

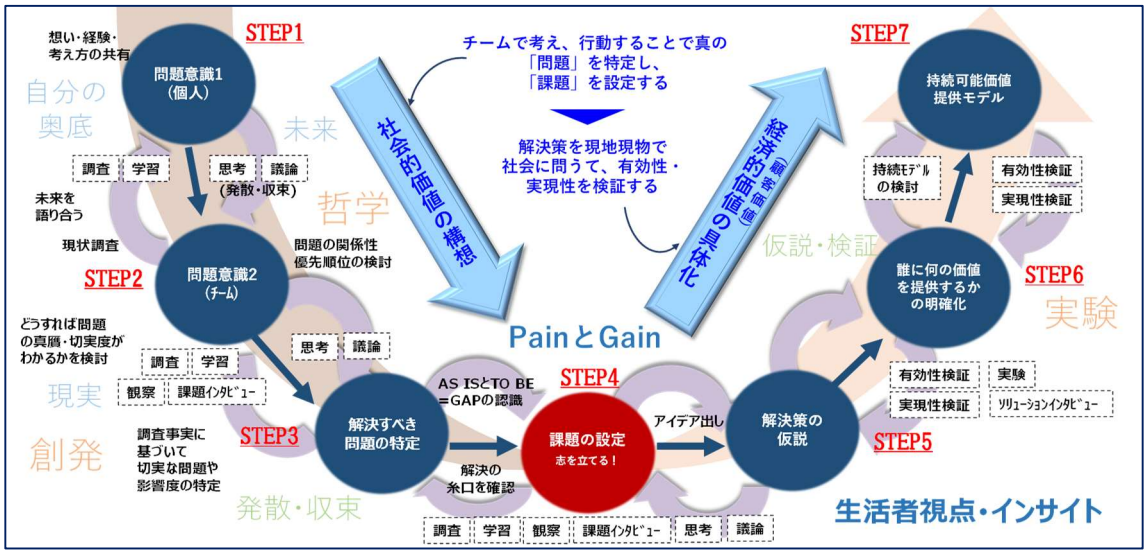
月１回（土日）の頻度で開催する研究会は、５～６名の学生と企業人混成チームでテーマの深堀りやソリューション型ではない課題解決の企画立案を目指すことを目的とし、そのために必要な「当たり前を疑う」などの思考行動変容や思考法、およびその整理などを支援する AOL 型と SOL 型のセミナー（※）の実施を柱に、高知での現地調査や研究成果の共有（報告会等）などを行ってきた。

※　学術志向型学習(AOL；Academic-oriented Learning)：大学が長い歴史の中で蓄積してきた教養教育や専門教育を土台として普遍的な真理や高度に抽象化された概念理解を目指す学び

※　社会志向型学習(SOL；Social-oriented Learning)：流動的な社会状況において他者と共創する経験に基づいた学習

○　特徴２：持続可能な価値提供のための価値検討プロセスの展開

希望創発研究会では、営利や非営利を問わず、その目的を実現するための活動の総体を事業と定義し、目指すものは「持続可能な価値提供」である（下図参照）。ただし、目標のゴールは事業化提案にあるが、必須とはしていない。試行錯誤の活動プロセスこそが研究会の目的であり、哲学・創発・志および実直な仮説・検証をないがしろにした、辻褄合わせの結果を求めるものではないからである。



○　特徴３：目指すべき人財像アプローチの観点からの研究会プログラムの設計

希望創発センターでは、「哲学」と「創発」の習得と実践を通して、参画者の自主性を引き出し、自ら考える力を磨くとともに、事実を多面的にまた深く観察し、視野を広げ真の課題に到達できるように主体性を持って行動できる行動様式を身に付けるプログラムを「目指すべき人財像アプローチ（下表）」の観点から設計している。

目指すべき人財像のアプローチ
「なぜ」と考えることが習慣化したか？
「新しいものごと」ではなく、「普遍的なものごと」に目を向けることが出来たか？
他者との関わりによって、自分の特徴や物差しに気づけたか？
まずは「役に立つか？立たないか」の物差しではなく、自分自身の物差しでものごとを捉えることが出来たか？
近視眼的な目的指向に走るのではなく、自由に思考・行動が出来るようになったか？
研究会活動をとおして「感覚」や「感情」は揺れ動いたか？
社会に対して、あるいは自分自身に対して、これまでに感じたことがない違和感を持つようになったか？ また、その違和感の招待にアプローチ出来たか？
世界に対する捉え方が以前と変わったと感じられるか？
みんなでやるからこそ、辿り着ける場所があることを実感できたか？
日常を足場として、希望ある未来の創成の一翼を担ってやろうという気持ちが立ち上がって来たか？
自分のフィールドに戻って、これまでと違った目線で物事を見たり感じたりするようになったか？

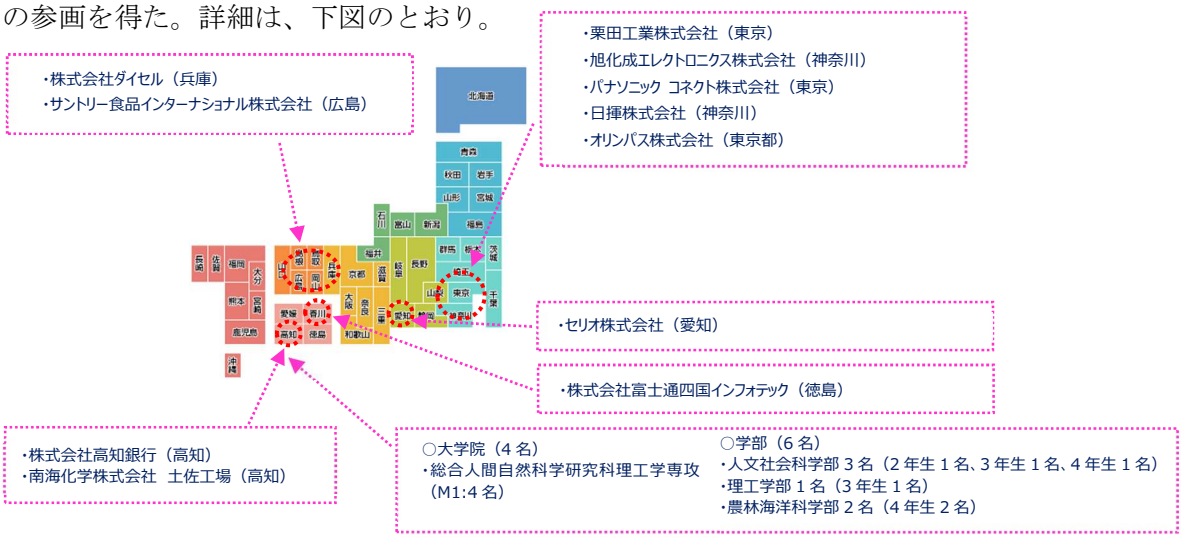
○　特徴４：参画者個人の思考行動変容の自覚化に係る支援

希望創発研究会においては、参画者が研究会活動における各自の思考行動変容の自覚化支援として、研究会活動終了時に研究成果に関わる個人論述書や活動のリフレクションレポートの作成を必須化し、これらの資料を参考に、チームのファシリテーションを担当する複数の関係教員（基本：客員と兼務各１名）が個人最終レビューシートを作成し、参画者や派遣企業担当者に対しフィードバックする方法を確立した。

2.2　2023（R5）年度取組実績

2.2.1　参画者

コロナ禍の影響も危惧されたが、対面実施６回、オンライン実施５回の計１１回のハイブリッド型で実施を想定し、また 2022（R5）年度から有償での取り組みとなったが、結果的には、参画社員は５地域から 11 社 10 名が、学生についても 10 名（院生４名、学部生６名）の参画を得た。詳細は、下図のとおり。



2.2.2　研究会例会の開催実績

2023(R5)年度は、2022 年度と同様に研究会は５月に開始とし、予定どおりハイブリッド型での年 11 回開催した。

チーム状態目標	開催月	開催日（原則、第2土日）	開催方法	内容
●思考行動の変容 自身の"ありたい姿"を起点にインスピレーションと洞察から未来の社会を創造・発想（未来の推論）し、その実現に向け真剣に考え・行動する準備が整っている。	5月例会	5月11日（土）－12日（日）	オンライン	参画メンバー全員での関係づくり
	6月例会	6月8日（土）－9日（日）	対面	参画メンバー全員で高知を知る
●問題の特定と解決課題の設定 "チームが実現したい世界観"が描けており，その実現に向けた「問い」を立て、解決すべき問題を特定すると共に、それを解決するための課題を設定できている。	7月例会	7月13日（土）－14日（日）	対面	チーム対話：チームプロジェクトの検討
	8月例会	8月24日（土）－25日（日）	オンライン	チーム対話：チームプロジェクトの検討
	9月例会	9月7日（土）－8日（日）	オンライン	チーム対話：チームプロジェクトの検討　－"ビジョン"の決定－
●解決策の仮説設定と検証実践プロジェクト案策定 現地調査、観察、インタビューなどの現状把握を通して、設定した課題を解決するための仮説が設定され、その検証のための実践プロジェクトが実施されている。	10月例会	10月19日（土）－20日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆"潜在的ニーズ"や"カスタマー像"の検討
	11月例会	11月23日（土）－24日（日）	対面	チーム活動：高知での現地調査＆"潜在的ニーズ"や"カスタマー像"の検討
	12月例会	12月14日（土）－15日（日）	オンライン	進捗状況報告会
●解決策の社会活用プロトタイプの策定 実践検証を通して解決策の仮説の有効性や実現性が確認され、その解決策を基にした社会活用プロトタイプが検討されている。	1月例会	1月11日（土）－12日（日）	オンライン	チーム対話：課題解決策の検証
	2月例会	2月8日（土）－9日（日）	対面	チーム活動･対話：高知での現地調査＆課題解決策の検証
	3月例会	3月1日（土）－2日（日）	対面	最終報告会

- 開催期間・回数：2023(R5)年５月～2024(R6)年３月（毎月１回土日開催）・11 回開催
- 開催方法
  - ＊　オンライン開催：５回（5 月、8～9 月、12～1 月）
  - ＊　対　面　開　催：６回（6～7 月、10～11 月、2～3 月）
    ※10～11 月高知県内での現地調査の実施

2.2.3　研究会例会プログラムの構成

毎月の例会プログラムは、原則、基礎セミナー（２時間程度）及びリフレクションの実施とチーム討議を基本とし、１０月～２月の現地調査を踏まえたチームでの討議成果を３月例会において共有（最終報告会）する構成とした。今年度の基礎セミナー及び全体ワークショップの開催実績は以下の一覧表のとおり。

開催月	基礎セミナー・全体ワークショップの実施内容
5 月例会	・理念醸成セミナー-希望創発センターとは-（講師：大嶋俊一郎副センター長） ・「希望」について皆で考えてみる！（講師：大嶋俊一郎副センター長） ・話してみて、お互いを知るワークショップ「私の気になる高知について」 （講師：谷俵太客員教員）
6 月例会	・超芸術トマソングループ活動（講師：谷俵太客員教員） ・トマソン形式知化（講師：縣拓充氏（千葉大学））
7 月例会	・フィールドに出て行って「土佐を知る！」（講師：谷俵太客員教員） ・基礎セミナー「希望創発研究会の進め方～皆で考える題材として～」 （講師：中島大輔客員教員）

8 月例会	・振返り「希望創発研究会の進め方」（講師：中島大輔客員教員） ・基礎セミナー【ワークショップⅠ】チームの″問い″を立てるために レクチャー＆個人ワーク（自己紹介＋気になる課題＋7 月例会インタビュー踏まえて） （講師：広石拓司（株式会社エンパブリック 代表取締役） ・基礎セミナー【ワークショップⅡ】チームの″問い″を立てるために 評価＆リフレクション（講師：広石拓司（株式会社エンパブリック 代表取締役）
11 月例会	・特別基礎セミナー「よみかき心得」 （講師：平井久義（元岡山大学教育学部附属中学校 国語科教員））
12 月例会	・お知らせ「SIP 事業の説明」 概要説明、高知大学取り組み紹介（講師：大嶋俊一郎副センター長） 東北大学取り組み紹介（講師：佐藤智子（東北大学）） ・協働セミナー「明日からはじめるローカルプロジェクト」 （講師：大嶋俊一郎副センター長） （講師：若狭健作（株式会社地域環境計画研究所 代表取締役）
1 月例会	・基礎セミナー【ワークショップ】ビジネスモデルの視点-持続可能な価値提供の視点から 各チームの活動を点検・展望する-（講師：中島大輔客員教員） ・基礎セミナー【ワークショップ】「思考と論述のトレーニング」 （講師：佐藤智子（東北大学））

2.2.4　研究会におけるチーム編成と支援体制

研究会活動は、５名程度の学生・企業人混成チームを４チーム編成して行った（詳細は以下の一覧表を参照）。チームには、企業関係教員（客員）と兼務教員各１名を配置し、例会時の対話の場づくりやプロジェクトマネジメントを行ってもらった。さらにチームメンバーが作成する年間活動リフレクションレポートや個人論述書を踏まえた最終レビューシート作成および自主的なチーム討議やメンバーのキャリア形成に関わる支援も行ってもらった。なお、検討成果を共有する最終報告会のタイトルは以下の一覧表のとおり。

○　最終報告会・チームの報告タイトルとメンバー所属先一覧（報告要旨は巻末資料参照）

チーム	タイトル・メンバー	
1	報告タイトル：「おやこうち」親子×高知から生まれる地元愛	
	参画社員（オリンパス株式会社） 参画社員（株式会社ダイセル）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工専攻）
2	報告タイトル：郷土愛と地尊心が向上し続けるための提案	
	参画社員（日揮株式会社） 参画社員（株式会社富士通四国インフォテック） 参画社員（株式会社高知銀行）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（理工学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻）
3	報告タイトル：高知県のキジとアメゴにみる、地方特産食品の課題と解決策について	
	参画社員（栗田工業株式会社） 参画社員（南海化学株式会社） 参画社員（パナソニック コネクト株式会社）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻）
4	報告タイトル：地域を担う関係人口と人生を豊かにする「人とのつながり」の創出について	
	参画社員（旭化成エレクトロニクス株式会社） 参画社員（株式会社ダイセル） 参画社員（サントリー食品インターナショナル株式会社）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻）

３　ＯＴＯＹＯプロジェクト

3.1　概要

3.1.1 目的

関係教員の中で大手企業の人事の変革を目指す客員教員と限界集落である大豊町東豊永を再生したい兼務教員の想いが出会い、それらの目的を同時に実現する OTOYO プロジェクトが誕生した。本プロジェクトは、企業の社員ばかりでなくこの社会に暮らし、考えるすべての人々を対象とする「明日の社会の希望をになう人財プログラム（以下、明日の人財プログラム)」と、パラダイム破壊型の限界集落再生を目指す「東豊永地区希望創発プログラム」を融合する事業として展開するものである。

3.1.2 実績と成果

2023(R5)年度においては、以下の成果（outcome）を得ることができた。

・明日の人財プログラムについては、2 回実施した。

・東豊永地区希望創発プログラムについては、活動拠点の NPO の運営補助をおこなった。具体的には、子どもが里山の自然に親しむ会および薬膳料理を楽しむ会などのイベントの実施をおこなった。

・小林製薬㈱との連携推進のための財源としての寄付金（100 万円、2022 年度および 2023 年度分）を得た。活動財源確保のためにいくつかの助成金の申請をおこなった。そのうち子どもゆめ基金から引き続き助成(2024 年度実施)が決定した。

・OTOYO プロジェクトの取組を通して、小林製薬㈱をはじめ、大豊町、高知県産業振興課（嶺北担当)、牧野植物園へと連携活動を昨年度から引き続きおこなった。

3.2　2023（R5）年度活動報告

OTOYO プロジェクトは、企業の社員ばかりでなくこの社会に暮らし、考えるすべての人々を対象とする「明日の人財プログラム」と、パラダイム破壊型の限界集落再生を目指す「東豊永地区希望創発プログラム」を融合する事業である。2023(R5)年度には、以下の取組と成果を得た。

3.2.1 明日の社会の希望をになう人財プログラム

明日の人財プログラムは、リモートで行う第１部と第３部、２泊３日の合宿形式の研修の第２部の３部構成とした。2023 年度は下表の日程および内容で 2 回実施した。第１部は本プログラムの趣旨説明と大豊の概要紹介、第３部は、参加者のキャリアの考察を目的としている。2022(R4)年度からの本格実施を予定していたが、プログラムの改善の必要性があり、実施は 2023 年度に延期した。

プログラムの参加者を集めるためにホームページの制作をおこなった。

回	日程	内容
1	2023 年 7 月 21 日	明日の人財プログラム第 1 部（大豊町やプログラムの紹介、チームビルド）
	7 月 28 日～30 日	明日の人財プログラム第 2 部（大豊町東豊永地区の住民との懇談、共同作業などにより、豊かな自然、人柄、生き方、想いに触れることを通じ、自身のなかの本質的な問いに向かい合う。）
	8 月 5 日	明日の人財プログラム第 3 部（東京において対面にて、第 1 部および 2 部で養った問題意識を踏まえ、課題の核心を探り当て、今後の思考・行動上の指針を見出す。）
2	11 月 10 日	明日の人財プログラム第 1 部（大豊町やプログラムの紹介、チームビルド）
	11 月 17 日～19 日	明日の人財プログラム第 2 部（大豊町東豊永地区の住民との懇談、共同作業などにより、豊かな自然、人柄、生き方、想いに触れることを通じ、自身のなかの本質的な問いに向かい合う。）
	11 月 25 日	明日の人財プログラム第 3 部（東京において対面にて、第 1 部および 2 部で養った問題意識を踏まえ、課題の核心を探り当て、今後の思考・行動上の指針を見出す。）

3.2.2 東豊永地区希望創発プログラム

東豊永地区希望創発プログラムが目指す「中山間集落の振興を図るため人の交流を盛んにし東豊永地区の活性化に寄与する」ための拠点の１つとして、地域住民によるＮＰＯ法人夢来里の風の運営・支援を行った。

ＮＰＯ法人夢来里の風の運営・支援に加え、市川部会長及び土居客員教員が既存のＮＰＯ法人ぬた守る会や東豊永集落活動センターの会合に参加し、関係者との信頼関係構築に努めた。

本プログラムの取組に際し、企業が注目する CSV（共通価値の創造）を推進していた小林製薬㈱と連携し、連携推進のための寄付（100 万円）を得た。活動財源確保のためにいくつかの助成金の申請をおこなった。そのうち子どもゆめ基金からの助成（2024 年度実施）が 2023 年度に引き続き決定した。

４　人間関係形成インターンシップ（Society Based Internship；SBI）

4.1　概要

人間関係形成インターンシップ（SBI）の基本コンセプトは、(a) 参画するすべての協働者が「本気」で取り組める仕組み、かつ (b) 本気の取組が醸成する相互信頼関係の形成にある。(a)，(b) を達成するために、学生の場合、事前セミナーに始まり、３人一組での 15 日間のインターン、実習終了後の事後セミナーおよび報告会、さらに、その後半年間に亘って行う月 1 回の振り返りと 6 ヶ月目の再度の報告会を実施する。受け入れ企業の実習支援者（SV；スーパーバイザー）については、学生への 15 日間の振り返り（面談）支援、日報へのコメント記入や報告会への参加などを実施する。なお、両者の本気形成のための支援として学生対象のセミナーと SV 向けの目標設定塾など実習前・実習後に実施する。

4.2　2023（R5）年度活動報告

第 22 期（2022 年 10 月～2023 年 3 月に実施）の 6 ヶ月後報告会を 2023 年 9 月 29 日に実施し、11 名に修了証書を授与した。

第 23 期は、以下のスケジュールで行った。

日程	内容
2023 年 5 月 2 日～6 月 9 日	学生募集期間
6 月 5 日～9 日	何でも相談会
7 月 5 日	マインドアップセミナー（学生対象）
7 月 9 日	チームビルディング＆目標設定セミナー①（学生対象）
7 月 23 日	チームビルディング＆目標設定セミナー②（学生対象）
7 月 27 日	目標設定塾＆顔合わせ（SV 対象）
8 月 24 日	マナー研修会（学生対象）
8 月 28 日～9 月 15 日	実習
9 月 4 日	中間モニタリング
9 月 20 日	事後モニタリング＆目標設定総括セミナー（学生対象）
9 月 29 日	目標設定総括塾（SV 対象）＆振り返り報告会（全体対象）
12 月	3 カ月後 SV 訪問
2024 年 3 月 6 日	6 カ月報告会

実習先企業は、高知機型工業株式会社・株式会社ファースト・コラボレーションの２社である。参加者は、人文社会科学部（2 年生２名）、理工学部（2 年生２名）、農林海洋科学部（1 年生１名）、地域協働学部（2 年生１名）と様々な学部の学生に参加してもらうことができた。

学部	人文社会科学部			教育学部			理工学部			農林海洋科学部			地域協働学部			計
学年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
第22期	3	3					1	1		1			1	1		11
第23期		2						2		1				1		6
小計	**3**	**5**	**0**	**0**	**0**	**0**	**1**	**3**	**0**	**2**	**0**	**0**	**1**	**2**	**0**	**17**
学部計	**8**			**0**			**4**			**2**			**3**			**17**

実習中の日報・週報では、実習での個々の気づきに加え、振り返りでのチームメンバーや SV の言葉による気づきも多く見られた。また、事前・事後のセミナーの振り返り報告でも、手応えを感じているコメントが多く見られ、全体を通してコンセプト通りの成果が得られていた。

実習後の 2023 年 10 月～2024 年 2 月までの期間は、チームメンバーだけで集まり、1 ヵ月をどういう意識で過ごし、次の 1 ヵ月はどういう目標を立てて行動するか意見交換する「Tea Time」を実施した。その間の 12 月には、各チームが 3 カ月後 SV 訪問をし、SV（への近況報告と SV からのアドバイスをもらった。これら実習後の活動報告を 6 ヶ月後報告会で発表してもらった。どの学生も SBI で学んだことを活かして新たな目標を立て、新たな活動へと繋げており、SBI での学びの定着を感じることができた。

一方、SV に対しても事前の目標設定塾、事後の目標設定総括塾を実施し、2023 年 10 月 20 日に開催した実習先企業との談話会では、SV の成長につながるプログラムだったと評価された。

５　戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)

5.1 概要

戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）とは、内閣府総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）が、司令塔機能を発揮し、府省の枠や旧来の分野を超えたマネジメントにより、科学技術イノベーション実現のために創設した国家プロジェクトである。

これまで、第１期（2014～2018 年度）11 課題、第２期（2018～2022 年度）12 課題に取り組み、2023 年度からはじまった第３期（2023～2027 年度）14 課題では、技術だけでなく、制度、事業、社会的受容性、人材の５つの視点から必要な取組を推進し、基礎研究から社会実装まで一気通貫で研究開発を推進している。

5.2 本学の取組

戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）第３期研究課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」に大島俊一郎希望創発センター副センター

長の「主体性を醸成する生涯学習プラットフォームの構築と「知」の総合化」が採択され、共同研究開発機関である東北大学、千葉大学と共に研究開発を行う。

具体的には複数の大学・自治体・企業等において、「サマセミ型の学びの場」を企画・実践するために、それぞれの実行委員会を立ち上げる。また、D&I の視点から、「新たな『学び』」や新たな働き方を大学や企業に導入するための条件を明らかにするために、高知大学や東北大学でこれまで開催してきた「哲学カフェ」や「オンライン公民館」といった各種イベントを継続的に開催する。さらに、「サマセミ型の学びの場」の一環として、小学校、民間企業、大学が協同して主体性を醸成する学びの機会を「食育：出前養殖プロジェクト」を通じてつくる。

Society 5.0 を生きる社会人に必要なリカレント・リスキリングの具体的なコンテンツを特定・開発し、その有効性を実証するために、まず、今年度立ち上げた養殖コンソーシアムで挙げられた研究課題について研究開発を始める。

5-3　2023（R5）年度活動報告

「地域でのサマセミ型学びの場」では、8 月 27 日（日)に室戸市で「おらんくの室戸大学サマーセミナー」を開催した（下記左図)。「サマーセミナー」とは、誰でもセンセイ誰でもセイトを合言葉に、実際の学校をお借りし、実際の教室を使って、37 コマの授業を開講した（下記右図)。この「サマーセミナー」の開催目的は、社会教育の一環として、地域の人々が主体的に学び、学びの楽しさを実感し、地域のことをよく知り繋がる機会（自治）を共に創造することを目的とした。その結果、「サマセミ型学びの場」で出会った様々な人たちと繋がることで多様な連携が生成され、他のイベントにおいても「学びの楽しさ」を他者に提供でき、主体性の醸成が確認された。また、室戸市だけではなく、いの町でもプレイベントとしてサマーセミナーが開催され、2024 年度は、室戸市といの町で盛大に「サマーセミナー」が開催される予定である。さらに、後述の Seekers の活動のとおり、高知大学・東北大学・千葉大学と連携して「哲学カフェ」や「オンライン公民館」などの協同学習を行った。その結果、オンラインを通じて、地域の方々や地域の文化、これまでの経験が異なる人たちと対話することで、新たな気づきが生まれ、それぞれの参加者にとって刺激的な学びとなった。この出会いから、「まずは行動してみることの楽しさ」や「大人はもっと頑張らないといけない」といった参加者からの声もあり、主体性の醸成が確認できるような意見が数多くあった。

また、高知大学を中心に、「養殖コンソーシアム」を計 8 社の企業と連携して立ち上げた。このコンソーシアムでは、産業チェーンを意識して、生産、流通、販売、医療、化学、IT ならびにエネルギー関係の事業を行っている企業に参画していただいている。ここでは、生活者として参画していただくことを重要視しており、経済原理だけで繋がりがちな現状の課題（効率化による思考、行動の画一化）に対して、この関係性を人と人の関係性に繋ぎ変え、思考、行動の変容を図ることで、イノベーティブな発想を生み出し、かつ生まれた発想を参画者で協働し、迅速に社会実装に繋がるものやことにつくり上げる仕組みを立ち上げた。

6　その他

6.1 学生自主団体 Seekers の活動実績

2023 年度の Seekers では、「対話すなっく」、「オンライン公民館」および「出前養殖プロジェクト」を実施してきた。

6.1.1 対話すなっく

全国的に行われている「哲学カフェ」のことであり、日頃気にもとめない当たり前なことについて語り合う場所である。今年度は、高知大学の大学生同士で計 3 回、東北大学、千葉大学の学生および社会人と一緒に計 5 回実施した。両大学の学生に加えて、社会人（企業）も参加し、学生と社会人の共創的な学びの場となった。

6.1.2 オンライン公民館

オンライン公民館は、月 1 回のペースで開催し、毎回、研究会関係者や Seekers、高知県内の中高生から希望者を募る形で次の表のとおり実施した。

開催回	開催日	タイトル	担当者	備考
第 1 回	2023 年 5 月 22 日	ハナアブの魅力	前田 蛍太	高校 3 年生
		～ビールの世界～ビデオ ON 笑顔を見ながらカン	公文 晃生	研究会修了生
第 2 回	6 月 19 日	ジンデ池の生物調査と保全活動	植村 優人	高校 3 年生
		お前の飯がマズいのは当たり前	森本 瑛智	登録学生
第 3 回	7 月 19 日	俺のダイエットに任せろ！	山本 琉誠	大学 1 年生
		3 塁ランナーコーチの野球観	宝金 実央	研究員
第 4 回	9 月 19 日	海外ってすごいなって話	芦田 知輝	研究会修了生
		中学生が語る「おこづかい事情」	中学生 4 人組	中学 2 年生
第 5 回	10 月 25 日	「金魚すくい」という競技とは	長弘 菜摘	登録学生
		ミミズハゼと私	小野 晄	中学 3 年生
第 6 回	12 月 19 日	好きなことで勝って行く	加藤 拓也	企業人
		一魚一会	長弘 菜摘	登録学生
第 7 回	1 月 17 日	きみの“たね”を創りあげたい！	澤田 朱夏	高校 3 年生
		地域×清掃＝未来	山本 稜平	高校 1 年生
第 8 回	2 月 26 日	なぜ釣りは底なし沼なのか？	綾野 裕之	登録企業人
		「中芸」と「柚子」で生きづらい世界が変わった	尾中まゆり	登録学生

6.1.3 出前養殖プロジェクト

「出前養殖プロジェクト」の企画内容は、主に、ブリ、マダイおよびヒラメの稚魚を園児が飼育する体験型学びを提供するものである。1 日 2 回の餌やりと水温の確認を毎日実施してもらった。最終日には出前授業 （飼育体験した同魚種を給食として提供） を実施し、魚という命を我々人間はいただいて生きていることを体験してもらった。

開催日	対象	担当者
2023 年 6 月 12 日～6 月 23 日	あおい保育園	養殖魚飼育、出前授業
6 月 19 日～6 月 28 日	芸術学園幼稚園	養殖魚飼育、出前授業
7 月 11 日～7 月 19 日	桜井幼稚園	養殖魚飼育、出前授業
10 月 10 日～11 月 7 日	神田小学校	養殖魚飼育、出前授業
12 月 2 日	桜井幼稚園	移動水族館
12 月 3 日	こうちこども未来ビレッジ	移動水族館
12 月 25 日・2024 年 1 月 12 日	東京都立羽村特別支援学校	養殖魚飼育、出前授業
2 月 19 日	芸術学園幼稚園	養殖場中継
	桜井幼稚園	養殖場中継
3 月 11 日	あおい保育園	養殖場中継

このプロジェクトの結果、生徒が普段食べている魚を飼育することで、「命」の重要性や「食」へのありがたみを実感を伴って再認識してもらうことができた。また、魚の飼育を通じて、理科や社会といった普段の授業との繋がりが実感でき、面白くなったという生徒や大学に対する興味をもった生徒が複数人確認された。

2023（R5）年度希望創発研究会　最終報告会資料の要旨集

最終報告会・チームの報告タイトルとメンバー所属先一覧

チーム	タイトル・メンバー	
1	報告タイトル： 「おやこうち」親子×高知から生まれる地元愛	
	参画社員（オリンパス株式会社） 参画社員（株式会社ダイセル）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工専攻）
2	報告タイトル： 郷土愛と地尊心が向上し続けるための提案	
	参画社員（日揮株式会社） 参画社員（株式会社富士通四国インフォテック） 参画社員（株式会社高知銀行）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（理工学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻）
3	報告タイトル： 高知県のキジとアメゴにみる、地方特産食品の課題と解決策について	
	参画社員（栗田工業株式会社） 参画社員（南海化学株式会社） 参画社員（パナソニック コネクト株式会社）	参画学生（農林海洋科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻）
4	報告タイトル： 地域を担う関係人口と人生を豊かにする「人とのつながり」の創出について	
	参画社員（旭化成エレクトロニクス株式会社） 参画社員（株式会社ダイセル） 参画社員（サントリー食品インターナショナル株式会社）	参画学生（人文社会科学部） 参画学生（総合人間自然科学研究科理工学専攻）

「おやこうち」親子×高知から生まれる地元愛

１．研究テーマの設定

1.1 背景

地域活性化の活動を行っている方々へのインタビューから、積極的な活動を行っている人は地元に対し強い愛着を持っており、熱意を持って活動に取り組んでいることが分かった。このような「地元愛」をもつ人を増やしていくことが、地域活性化の重要な要素になると考えられる。しかしながら、「地元愛」を育むための効果的方法は、我々の知る限りこれまで見出されていない。

1.2 研究目的

本研究では、「地元愛」は周囲の人との良い関係から良い思い出が生まれ、そこから形成されるのではないかという仮説のもと、親子が高知でポジティブな経験をすることを「おやこうち」とネーミングし、支援施策・イベント等を企画することを目的とした。

２．研究活動の結果

2.1 仮説検証

まずは、上記仮説を検証すべく、東北大学大学院での研究内容(1)を参考にして地元への愛着尺度を図るアンケートを行った(回答数 285 名)。その結果、地元が好きな人は、地元貢献意欲が高く、人との交流が好きであり、地域に大切な思い出があることが分かった。また、子育てのしやすさ、自然の豊かさ、人間関係の良さを住む地域に求めていることも分かった。仮説が立証できたため、「子育て・自然・人間関係」を元に「地元愛」が育まれるような親子イベントの企画を行った。

2.2 アイデア出し～アイデアの変化

複数出たアイデアの中から、高知の自然に親子と触れる事を狙いとしたキャンプイベントを企画し、親子イベント企画運営の経験者に評価を受けた。結果、「参加者の自発性を促がす、その場にあるもので地域性を出す」等の経験者しか分からない貴重なアドバイスを得た。改善に向けて再度議論した結果、撮影した生き物の写真から AI で名前を判定するスマホアプリ「バイオーム」を活用したイベント案を思い付いた。トライアルの結果、イベントに活用できそうな感触を得た。

2.3 地域課題との結びつけ～イベント内容

イベント開催場所としては、中央卸売市場を選定した。高知新聞の情報(2)や現地調査の結果から、市場への来場者減少が極めて深刻であり、「また人に戻ってきて欲しい」というのが市場関係者共通の思いであることが分かった。そこで、まずは現在休止中の市場開放デーを復活させ、その日に合わせてバイオームを使った親子向けイベントを実施する。内容としては、市場で販売している生き物の写真を撮影しポイントを獲得、規定ポイント達成で商品券を進呈する。本イベントにより、親子の接点、地域の人との交流、地元を知る機会が増えることに繋がり、その結果地元愛が育まれることに期待できる。さらに、地域課題解決の一助にも期待できる。

３．まとめ

地元愛の育みに加えて地域課題解決にも期待できる親子向けイベントを今回企画した。今後は、まず、中央卸売市場での試行に向けて農林水産部市場課に本イベントを提案する。

【参考文献】

1）地域への愛着研究会　http://www.pubnurse.med.tohoku.ac.jp/aichaku/index.html
2）デジタル版高知新聞記事(2023) https://www.kochinews.co.jp/article/detail/701337

以上

郷土愛と地尊心が向上し続けるための提案

1. はじめに

1.1. 背景説明

高知大学希望創発研究会チーム 2 は、「高知県民に自信(地尊心(※))を持ってもらう」を目的として、中芸地域の方々の郷土愛と地尊心(※)が向上し続けるための提案をすることとした。各メンバーの関心事 と チーム活動と対話を重ねた結果、この目的および提案が生まれた。

1.2. 立てた問い

「郷土愛と地尊心(※1)との間にギャップが生じているのではないか？」、このギャップを解消または縮小するための取組みが必要であり、その取組みが多くある程、幸福感を持って生き生きと暮らす人達が増えて、結果として当該地域に活気がもたらされる、と考えた。 (※1)「地尊心」とはチーム２がつくった造語。その土地や地域が魅力的だと思う気持ち。誇り。

2. 提案の具現化、活動内容

2.1. 活動で行ったこと

① 中芸地区で活動する 20 名超へのインタビューを実施し、この内容を基にして、課題設定・取組意義・具体提案を策定した。
② 作業工程（A.コンテンツ化・B.WEB サイト作成・C.アンケート作成・D.情報発信・E.一次情報収集・F.評価/分析・G.中芸地区へのフィードバック・H.評価/分析）を計画した。
③ 中芸地区の魅力的な取組み（人・場所・食べ物）にフォーカスし、それらをコンテンツ化して発信するための WEB サイトを作成した。
④ 友人・知人の伝手で、高知県内外 26 名に対して WEB サイトを公開し、その反応を、アンケート形式とコメント形式で回答(以下、「一次情報」と言う)を得た。
⑤ 収集した一次情報の F.評価・分析を行った。また、チーム 2 が取ったアプローチの有用性や妥当性も鑑みて、今後のアクションを整理した。

2.2. 活動の結果

① 26 名から得たアンケート回答において、高知県内の方々の 9 割以上・高知県外の方々の 10 割が、WEB サイトを見たことで、中芸地域に対して何らかで面白いとの感情を抱いた。
② 26 名から得たアンケート回答において、高知県内の方々の 8 割・高知県外の方々の 6 割以上が、WEB サイトを見たことで、中芸地域に行きたいとの感情を抱いた。
③ 各コンテンツに対するコメントにあった内容の多くは肯定的なモノが多かった。
④ 各作業工程において、改善すべき点が数多く存在することが認識できた。
⑤ 本来の計画では、WEB サイト・一次情報を中芸地域の方々に提供し、その結果、中芸地域の方々の地尊心が高まったか否かを検証する予定(G/H)だったが、そこまで至らなかった。

3. 結論、1 年間の成果

- 各個人が抱いていた関心事項を大切にしつつ、実施した多くのチーム活動およびチーム対話を重ねた結果、チームの共通認識として「高知県民に自信を持って欲しい」の思いにたどり着けたことが、最も意義あることと認識する。
- 計画した作業工程の完遂には至らなかったが、目的達成に向けた取組みを開始し、一次情報を収集し評価・分析したことで、今後実施するべき事項が明らかになった。

以上

高知県のキジとアメゴにみる、地方特産食品の課題と解決策について

１．背景および目的

高知県では人口の自然減と高齢化が課題となっている [1)]が、その地域の住民が本当に人口増加や地域活性化を望んでいるかは議論が分かれる。一方で、地域ごとに特産食品があることは、日本の食に多様性があることを示しており、豊かさであると考えられる。高知の食としてはカツオがよく知られるが、実際にはこの他にキジやアメゴなど様々な特産食品がある。しかし、高知在住メンバーでさえその存在を知らず、知名度の低さが窺われた。人口減少の中でこの状態が続けば、上述の豊かさの喪失につながる可能性がある。そこで本研究では、これら特産食品生産者の思いと課題を明らかにし、持続可能性につながる施策を提案することを目的とした。

２．調査方法および結果

2.1　調査対象の選定

高知は太平洋に面した海洋県であると同時に高峻な山を背負った山岳県でもあり、地域ごとに独特のジビエや野菜が存在している。多くの中山間地域が人口減少の対策を急務とし、観光客や移住者集めに苦慮している状況において、本研究では隈研吾の建築物だけでなく、地域集落センターでのキジの養殖とアメゴの養殖に取り組んでいる梼原町に着目した。カツオ以外の食のコンテンツとしての可能性から調査対象とした。

2.2　生産者の課題

ヒアリングの結果、以下のことが明らかになった。(1) キジ・アメゴの養殖は梼原では伝統的な産業であったが、市場が拡大せず、人口減少に伴って衰退した。(2) その後、町の要請で集落活動センターが引き取り、引き継いだ方個人の強い意志によって小規模ながらも着実に事業が展開されてきた。(3) 事業拡大のアイデアはあるが、後継者不足で実現が進まないことが課題である。

ここで、高知には他にも多くの魅力ある食材があるが、日本全体をみても多様な特産食品があり、同様の課題を抱えているところが各地に存在すると考えられる。

2.3　実現・持続可能な支援策の考察と実施

上記の課題解決には、認知度の向上が必須であると考えられる。しかし、地域限定的な施策では、費用対効果が低い可能性が高い。そこで、場所と時間に囚われないターゲットへの訴求性が見込める施策として、SNS を活用した情報発信の検証を開始した。具体的にはまず、将来の顧客・後継者となり得る幼児、小学生をターゲットとして新規な絵本や、図鑑風の紹介資料の配布を実施した。特に絵本は、SNS での発信に限らず、製本して幼稚園や小学校に展開、また販売時の販促ノベルティなど様々な使い方ができるのではないかと考えている。これらを検証事例とすれば、将来的に他の様々な地方特産食品に展開できる可能性があると考えている。

３．結論

上記検証は開始したばかりであるが、空中戦としての SNS を中心としつつも、絵本の製本化に伴う地域での地上戦も重要であり、二つを織り交ぜた取り組みが必要である。

ここで、地域経済の活性化には、若年層流出と少子化を止めることが最優先課題であり、新たな食のコンテンツを作ることは、新規観光資源、雇用、移住者の増加につながる可能性がある。その施策には、本論のように SNS の活用に加え、幼少期から認知させることも必要であると考える。そして、多様な地方特産食品を持続可能にする事業の一例となることを強く願い、空中戦と地上戦のベストミクスについて今後検証を続けたい。

４．参考文献

1) 高知県産業振興推進部計画推進課．第２期高知県まち・ひと・しごと創生総合戦略．<file_2022525314504_1>,　(参照 2023.5.22).

以　上

「日本シニアニア計画」 ～関係人口と「人とのつながり」の創出～

１．高知県の課題とチームの問い

高知県は 2022 年の高齢化率が 36.1%と全国で 2 番目に高く [1)]、地域活動の担い手不足が深刻化している。横畠・岸本集落における現地調査でも集落の維持・再生には地域外の「関係人口」をいかに増やしていくかということが重要な課題となっていた。一方で、集落で精力的に活動している人の話を通して感じたことは、誰かとつながることで人は存在意義を感じ、その利他精神こそ生涯生き生きと活動するための源泉であるということだ。このような背景から我々は「誰かとつながり、他者を笑顔にできている自分と社会」を理想の社会像とし、これを目指すことで地方圏の関係人口の拡大と個人のワーク&ライフキャリアの充実が可能なのではないか、という問いを立て検討した。

２．日本シニアニア計画

我々が目指す理想の社会を実現するためには、人とのつながりとそれを持続可能にする仕組みづくりが必要不可欠である。そのソリューションとして「日本シニアニア計画」を考案した。

2.1　人とのつながり

人との出会いにより何かが変わったという話はよく聞く。現地調査でも、人との出会いによって価値観が変わり、目標をもって精力的に活動している人から話を聞くことができた。こうした人の共通点は「誰かの役に立ちたい」という利他精神と、自ら行動したことによって構築した新しい「人とのつながり」があることだ。この二つを持つためには多様な人との出会いが重要である。実際「マルチリレーション社会」によれば交流のある人間関係が多様であるほど、少ない人に比べて幸福度が 20%以上も高い事が示されている [2)]。これは人とのつながりが新たなワーク&ライフキャリアの選択のきっかけとなるからだ。生涯充実した人生には豊かな老後が必要であるが、老後を考え始める 40・50 代は仕事や家庭も忙しく、新しいつながりを見つける事は困難である。

2.2　関係人口と「人とのつながり」を創出するソリューション

地方圏の関係人口拡大と人生を豊かにする人とのつながりの創出、この二つの課題を楽しく解決するソリューションが「日本シニアニア(seniornear)計画」だ。シニアニアは造語で　senior(まで輝く)×near(誰かとつながる)という概念から名付けた。シニアニアでは、自分の技術・知識を伝えたい「先生」、先生の募集・発掘、運営を行う「事務局」、興味をもった「生徒」で構成される。先生はプロである必要はなく、伝えたいことがある人は誰でも先生となれる。先生は生徒の役に立ち、他者を笑顔にすることで感謝の言葉と継続するための講師料、生徒との新たなつながりを得られる。生徒は新たなワーク＆ライフキャリアや人とのつながりを発見するきっかけを得られる。シニアニアを開催する地域では地域外の先生・生徒が関係人口となる機会が得られる。これを事務局が継続的に運営することで、関係人口獲得による地方創生と個人のワーク&ライフキャリアの充実を実現する。しかし、継続的な運営には資金と人が必要である。そこでこれまで希望創発研究会で提案されたビジネスモデルを実践する一般社団法人を立ち上げ、企業版ふるさと納税や企業・個人からの基金・寄付により資金を得る。シニアニアはその一般社団法人のプロジェクトとして実行され、継続的な運営に必要な資金と人を供給する。

３．まとめ

我々は人とのつながりこそが社会と人生を豊かにすると考え「日本シニアニア計画」を提案した。また、提案を継続的に運用する為の仕組みについても検討した。本提案の実証実験の第一弾として、岸本集落にて「石像ワークショップ」を開催し、提案の最も重要な要素である「人とのつながり」について検証する予定である。

参考文献

1）内閣府　令和５年版高齢社会白書（全体版），４　地域別に見た高齢化
2）リクルートワークス研究所(2020)「マルチリレーション社会」